

「出て行けええええっ！この女あああ
っ！」
年配男性の突然の怒号とともに、玄関がガラツと開きました。
「おおおお落ちてきてくださいっ！早まってはいけませんっ！」
中から若い女性が後ろ向きで飛び出して、そのままドスンとしりもちをつきました。
「おじいさんっ！」
今度は玄関の中から年配男性の妻とおぼしき女性が夫を背中越しにはがい絞めました。
「二度とこの土地の敷居をまたぐんじやねえ！」
そう言ったおじいさんの手にはなんと草刈用の鎌が握られています。
「し、失礼しましたああっ！」
そう若い女性は言い残しますと、ビジネスかばんを両手で抱きしめ一目散に逃げ出しました。書類のいくつかは散乱したままです。

こ　こ　は　、　と　あ　る　片　田　舎　で　す　。　先　ほ　ど　の　若　い
女　性　の　名　は　“　近　江　涼　”　（　お　う　み　す　ず　）　。　都
心　で　大　手　土　地　開　発　の　企　業　に　勤　め　て　い　る　、　い　わ
ゆる　キ　ャ　リ　ア　ウ　ー　マ　ン　で　す　。　彼　女　は　こ　の　度　プ
ロ　ジ　ェ　ク　ト　の　チ　ー　ム　に　抜　擢　さ　れ　、　こ　こ　の　土　地
買　収　に　派　遣　さ　れ　て　い　た　の　で　す　。　
キ　ャ　リ　ア　ウ　ー　マ　ン　と　聞　け　ば　花　形　の　エ　ー　ス　み
た　い　に　思　わ　れ　が　ち　で　す　が　、　涼　の　実　態　は　決　し　て
イ　メ　ー　ジ　通　り　で　は　あ　り　ま　せ　ん　。　と　い　う　の　も　彼
女　の　会　社　は　歴　史　が　あ　り　保　守　的　な　男　性　社　会　が　幅
を　効　か　せ　て　い　た　か　ら　で　す　。　今　回　の　抜　擢　も　ね　た
み　や　中　傷　の　対　象　と　さ　れ　、　幹　部　の　中　に　は　あ　わ　よ
く　ば　失　墜　し　て　く　れ　と　言　わ　ん　ば　か　り　に　色　々　難　癖
を　つ　け　て　く　る　人　間　も　い　ま　し　た　。　
加　え　て　彼　女　の　見　た　目　が　ぽ　っ　ち　ゃ　り　し　て　い　て
童　顔　な　の　が　余　計　に　な　め　ら　れ　て　し　ま　う　の　か　も　し
れ　ま　せ　ん　。　そ　ん　な　こ　ん　な　で　こ　の　出　張　先　に　も　上
役　の　顔　色　を　気　に　し　て　や　ま　な　い　課　長　か　ら　、　ひ　っ
き　り　な　し　に　確　認　の　電　話　や　ら　メ　ー　ル　が　送　ら　れ　て
く　る　の　で　し　た　。

「あゝ、まいったわぁ・・・。」

そう言うと涼は神社の本殿にある階段に腰掛けました。そして来る途中で買ったペットボトル茶を開け、ぐびっと飲んだのでした。

しばらく彼女はぽーっと宙を見ていました。だが、突然ガバツと立ち上がり、くるりときびすを返しますと小銭を賽銭箱に入れました。

そしてガラランガラんと豪快に鈴を鳴らし、ぱんぱんっと作法もへったくりもなく柏を打つたのでした。

「神様、お願いっ！私に力を貸してちょーだ
いっ！」

涼はぎゅっと目をつむって一心に祈りました。が、やがて目を開け、はーと肩を落とすし、

「・・・無理か。ここが元凶だもんね。」
と、罰当たりなことをつぶやいたのです。

この神社にはかつてこの地方を救ったと

される白蛇が奉られています。人々はこの蛇に強い信仰を感じ、救ってもらった我が土地を手放すと崇りがあると信じて生きてきました。その真意はともかく、田舎独特の風習を破って何か起きたときに自分に責任が及ぶのを恐れて誰も先祖代々の遺産を手放す者がいなかっただのです。骸化していた近年、都心へ直通のバイパスと鉄道が開通しました。同時に大通り沿いに今までまったくなかったコンビニやラッシュピニングセンター、はたまた総合病院なども新たに建設され、あつという間にベットタウンとしての条件が整ったのです。涼の会社もさっそく乗り出してきました。が、ライバル会社との競争で土地の値段がどんどん上がり、今や採算が合わなくなってきました。たのです。ただし今回、彼女が任されたこの辺りをの

ぞいては・・・。

実はここには聖地、つまり白蛇が住んでいたとされる泉があるのでした。

さすがに地元の間人もその自負が根強く、他とは比べ物にならないほど土地信仰が浸透していました。ライバル会社もしばらく粘っていましたがやがて一時保留ということ撤退していったのです。涼の会社幹部はそれを承知で、彼女にこの土地買収をやらせたのでした。もちろん失敗を織り込み済みで・・・。

しかし幹部はわかっています。涼が筋金入りの負けず嫌いだということ。なんと彼女は若い世代に家の権限が移った所を中心に次々と買収を成功させていったのです。そしてパラパラではありませんが新築住宅に新しい家族が引っ越して来ました。驚いたのはその幹部よりも地元の年寄りの方です。あれよあれよと昔あった土地が更地にされ“売地”の看板が立っていたのですから・・・。

こうなると“ジジイとババア”はいよいよ面白くありません。ですから涼が営業に行きますと悪魔の化身として先ほどのような扱いはなるのでした。しかし、採算ベースに乗せるにはどうしてもその“ジジイとババア”の土地が必要なのです。・・。

結局、今日はひとつもまとまらずに終わりました。帰ったらどう報告すればいいのか、それを考えると胃が痛くなりました。」「

「えくん、帰りたくないよう。・・。」

涼は駄々っ子のようにそう愚痴を言いますと営業車の横を通り過ぎて、てくてくと歩き始めました。

途中で、ぽつりぽつりと雨が降ってきたので、彼女はあわててかばんの中に入っていた折りたたみ傘をさしました。間もなく小・中一貫校の校庭にたどり着き、涼はなんとなくその中を見つめたのです。あたりはすっかり薄暗くなっており、深い

青色の空気が漂っていました。人影はまった
くありません。新興住宅が建ち始めたとはい
え、やはりここは田舎なのです。ましてこん
な雨振りの日暮れ時など尚更さみしさが増し
ていくのでした。
しんしんと降る水滴は土面にたまり、さな
がら大地を流れる川のように排水用のU字路
に流れ込んでいきます。その青い時間の空間
に、ちようど滑り台の横あたりでしようか、
ぼうつと黄色い光が灯っていました。
「・・・あれ・・・何？」
気がついたら涼は無意識のうちにつつつ
とそこへ近づいていました。彼女は負けず嫌
いと同じくらい好奇心が旺盛なのです。
いとと同じくらい好奇心が旺盛なのです。
てクマちゃんのカヤラクターがプリントされ
た幼児用の傘です。骨の先端にはプラスチック
クのまああるいポッチが被っています。しかし
この時、彼女はなんとなくその傘に変な違和
感を持ったのでした。

「・・・？」
涼がそっとその奥を覗き込みますと、四
五歳くらいの男の子が向こうを向いてしゃ
がんでいました。
「・・・ボク、ここで何をしているの？」
それとなしに彼女が声をかけます。すると、
何かをしていた男の子は肩越しにちらりとこ
ちらを見上げました。この年齢の子は見慣れ
ない者にとって顔が皆同じに見えます。目の
前の顔も、ごたぶんに漏れずありふれた、ち
つちやな男の子でした。そして傘と同じクマ
ちゃんのカヤクタールが、おそろいのレイン
コートと長靴にもプリントされていました。
「ごめんなさい、でもこんなところでは一人
いると変な人に連れて行かれちゃうよ・・・。
君、お名前前はなんて言うの？ パパやママはど
うしたのかな？」
男の子はじっと涼の顔を見ていました。が、
またふいつと向こうを向いてしまいました。
彼女はどうしたものか思案しているときに、

“例の”電話がケータイにかかってきました。
涼は一瞬迷いましたが、どうせ会社に戻ればまた嫌味の応酬なのでここでも同じだろうと通話ボタンを押したのです。
「・・・はい、あ？課長でしたか。」
わざとらしくとぼけます。
「・・・ええ、今日はだめでした。・・・えっ、でも地主様はかなりご機嫌がよろしくないようですよ。ええはい。こちらも誠心誠意尽くしているつもりなのですが・・・はい、なかなか難しいです。・・・ええっ！色仕掛けでもって、相手はお年寄りですよ！・・・はい・・・はい、い、では今日はこのまま帰宅してもいいのですね、わかりました。それでしたら週明けは直でこちらへ出張しますの・・・はい、お疲れ様です。」
涼は、ピッとケータイを切るやいなや、「チッククショーンッ、エロ課長め！地獄へ落ちやがれっ！」
と、悪態をつきました。すると、男の子がい

ん。ただ、とっさにケータイの電源を入れ、
その事件のことを検索していたのです。まもなく記事が出てきました。

“○○○○年△△月××日

S県N村にて早朝、地元の山林関係者が山に向かう途中、がけ下に乗用車が転落しているのを発見した。車は炎上した模様で黒く焦げており、
から夫婦とおぼしき焼死体を発見。尚、この夫婦には翌年小学校に上がるはずの長男がいたが、車中に遺体は見つか
らなかつた。行方を追ったものの結局見つからず、まもなく捜索は打ち切られた。ちなみにこの家族が家を出るときに、近
なるその男の子の背格好は・・・”
涼は、この後の記事を読んで思わず固まり
ました。というのも、その手がかりがあまり
にも目の前の男の子に似ていたからです。黄

色い傘、レインコートそして長靴。加えて三
点には同じクマちゃんのプリント・・・。
彼女の背筋に今まで感じたことのない悪
寒が走りました。その時です、急にケータイ
のメール着信音がけたたましく鳴り響きまし
た。あわててチェックしようとしましたが、
なんと涼が何もしていないのに次々送られて
くるメールが勝手に開いていくのです。
「ちよっ、ちよつと何コレッ！」
未承認広告は受信しないように設定されて
います。とかいうかそもそも送られてくるメー
ルにはアドレスも件名も空白なのです。怖く
なった彼女は電源を切ろうとしました。しか
し切れません。ほかのボタンを押しても反応
は同じでした。すべてのメールには数行の「
」が記載されており、どうやら誰かの会話がそ
の中に書き込まれているようでした。
一通目「本当にこのままだったらどうしよ
う・・・。」

「アナタ、あの人はちゃんと連絡はとれているの？」

二通目 「駄目だ！電話もメールもつながらない！」

「あんなに在庫抱えちゃってどうするのよ！仕入れの支払いだつてまだあるんでしよう？」

三通目 「ともかくもう少し待ってみよう。。。」

「だいたい、今まで一度もコンサルティングも顧客の紹介もしてくれないじゃない！市場リサーチはない送られてくるのよ！」

四通目 「なんてこった！こんな大事なのに体調を崩すなんて。。。」

「私のパートだけじゃ、治療費すら全額払えないわ。」

五通目 「お前、何考えているんだ！こんな安物の壺に大枚はたきやがって！」

「だってこれには、あの方のすばらしいパワーが注入されているのよ！」

六通目 「あんな奴が神様なわけないだろ
う！」

「いいえ、あの方はイエス・キリストの生まれ変わりなの！きつと
私たちを救ってくださいさるわ！」

七通目 「とうとう万策尽きた・・・。」

八通目 「もうだめだ・・・。」
「もうだめね・・・。」

驚くべきことに、この男女の会話は外からではなく涼の脳に直接聞こえてくるのでした。

恐怖のあまり、彼女は持っていたケータイを、ばんつと地面にたたきつけました。そしてやっとその声が消えたのです。

・・・いつの間にか涼は自分の傘を手放して
いきました。ぽたぽたと雨だれが濡れた髪から

垂れていきます。あたりは再び青い静寂がゆっ
くりとその場をつつんでいきました。
しばらく沈黙の後、涼は先ほど黄色のちっ
ちやな傘に感じた変な違和感があるのか、は
つきりとわかったのでした。
地面がぬかるんでいるからこそなくてはな
らないもの。
・・・そう、この傘の周りには男の子の靴
跡がひとつもなかったのです。
涼は何を思ったのか、その傘に一步また一
歩と近づいていきました。どつきんどつきん
と心臓の鼓動が耳の内側に響きます。
そうして開いた傘生地の手をかけた、一
息してから、ざつと横にはじきました。
いませんでした。
そこには誰も
それを見た彼女はへなへなとその場にへた

れ込んでしまいました。やがて涼はがっくりと落としたその視線の先に“あるもの”があるのに気づきました。そこには紅葉のようなちっちゃな手とこれまたかわいらしい長靴の押し印がふたつずつぺったりと残されていたのです。

「・・・君・・・、そうか君だったんだね・・・」
彼女の瞳からぼろぼろと涙があふれ出してきました。

「・・・それから何日かが経ちました。あいかわらず涼はこの片田舎でいつもの通り営業に回り、そしていつもの通り追いつかれていきました。あのちっちゃな傘はと言いますと、散々迷ったあげく両親の眠っている地元の寺に預けることにしたのです。

しかしあの男の子はあそこでいったい何をしていたのでしょうか？

おそらく自分が確かにこの世に存在しているのだと誰かに知ってもらいたかったのでは

ないしようか？そしてその証があ傘と地面
につけた押し印だったのでは・・°そ
ういえば涼が電話のやり取りをして
いた時、すかさずこちらを振り返った
のも親同士の言い争いがトラウマに
なつて無意識に反応したのでしょ
う°しかしなんと云つてもあの送られ
てきたメールです°それはたぶん寝床
で男の子が聞いていた両親の会話だ
つたのではないかと聞いていた両親
の会話だったのかもしれません°しか
あこれらはすべて憶測です°もしか
したらあの出会いは幻だったのかも
しれません°涼の心の中にしっか
り根づいたのは明らかでした°
仕事の方はこれから困難続きでしょう°
しかし今、確実に生きていると実感し
ている自分を感じてから、彼女の心の
バランスはすっかり変わつてしま
いました°何とか、もつと遠くを見
るようになったのです°

園
の
田
舎
道
を
走
り
抜
け
て
い
く
の
で
し
た
。
そ
う
し
て
涼
の
営
業
車
は
今
日
も
さ
っ
そ
う
と
田